京都府京都市、京都御所の素晴しい環境

Kyoto Imperial Palace of Splendid Environment, Kyoto-shi

京都御所は、東西約 700m、南北約 1,300m と広大な敷地、桓武天皇により都が京都に遷った 794 年(延暦 13 年)に造営された大内裏(宮城)である。平安京の内裏は 960 年に焼失、災害時は一時的に京中の公卿邸を借用した。これを「里内裏」という、現在の御所は里内裏の 1 つ「土御門東洞院殿」の後身となっている。戦乱や火災によって荒廃した大内裏に代わって、事実上の内裏として機能している。京都御所は、京都府京都市上京区にある皇室関連施設で、14 世紀以来、1869 年までの間、内裏、すなわち歴代天皇が居住し儀式や公務を執り行う場所で、宮内庁京都事務所が管理している。

現在の京都御所は、もと里内裏の一つであった土御門東洞院殿の地である。南北朝時代(14 世紀半ば)から内裏の所在地として定着し、明徳３年(1392 年)の南北朝の合一以後、ここが正式の皇居となって明治２年(1869 年)、明治天皇の東京行幸時まで存続した。明治以降は京都皇宮(きょうとこうぐう)とも称される。

内裏は江戸時代だけでも慶長度(1613 年)、寛永度(1642 年)、承応度(1655 年)、寛文度(1662 年)、延宝度(1675 年)、宝永度(1709 年)、寛政度(1790 年)、安政度(1855 年)と８回も再建されている。1945 年(昭和 20 年)には戦時中の建物疎開で建築物の半数近くが保存のため解体された。

http://en.wikipedia.org/wiki/Kyoto_Imperial_Palace

現存する主な建物(10ヶ所)は、**紫宸殿**(ししんでん)、**清涼殿**(せいりょうでん)、**小御所**(こごしょ)、**御学問所**(おがくもんじょ)、**御常御殿**(おつねごてん)、**迎春**(こうしゅん)、**御涼所**(おすずみしょ)、**皇后宮御常御殿**(こうごうぐう おつねごてん)、**若宮・姫宮御殿**(わかみや・ひめみやごてん)、**飛香舎**(ひぎょうしゃ)などがある。

1.宜秋門(ぎしゅうもん)

京都御所には６つの門「①建礼門（南面)、②朔平門（北面)、③建春門（東面)、④宜秋門（西面南)、⑤清所門（西面中)、⑥皇后門（西面北)」があり、宜秋門が入口となっている。宜秋門までの道には、特別公開を目指す人がたえない。築地塀は東西 249m 南北 451m で、桧皮葺き、切妻屋根の四脚門である。

写真 1. 京都御所の宜秋門

写真 2.京都御所の御車寄

2 御車寄(おくるまよせ)

御車寄は、昇殿を許された親王、摂家などの正式な参内の場合のみ昇降する所である。

展示品：生花（ｲｹﾊﾞﾅ）・金屏風（ｷﾝﾋﾞｮｳﾌﾞ）。

3.諸大夫の間(しょだいぶのま)

正式な用向きで参内したときの控えの建物である。控えの間で身分に応じて異なる部屋を与え、襖の絵にちなんで「虎の間」、「鶴の間」と「桜の間」と呼ばれる。もっとも角の高い「公卿の間」、諸侯・所司代の控えの「殿上人の間」、それ以外のものの控え「諸大夫の間」の三室があります。

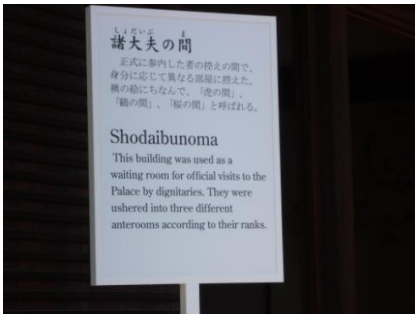

写真 3.京都御所の諸大夫の間

真ん中の間がツルのふすま絵の「公卿の間」、一番奥が虎のふすま絵で公卿の間である。一番手前にあるのが諸大夫の間(しょだいぶのま)である。

写真 4.京都御所の新御車寄

4.新御車寄（しんみくるまよせ）

新御車寄は、大正 4(1915)年、大正天皇の即位礼に際して、天皇皇后陛下のための玄関として建リツシタてられた建物である。 展示品:人形 2 体 五節舞姫ｺﾞｾﾁﾉﾏｲﾋﾒ(舞楽台ﾌﾞｶﾞｸﾀﾞｲ)。その後、昭和天皇や今上天皇（現在の天皇陛下）もご利用されている。 玄関前には人形が展示している。

５.建礼門(けんれいもん)

建礼門は、平安京内裏の外郭門や京都御所の門の 1 つである。平安宮内裏外郭の南正面にあり、内郭の承明門と相対する。東西の築墻はそれぞれ 39 間で、その両端に春華門および修明門があり、門外の東西に仗舎を設け、舎前に炬火を焼き、左右の兵衛がこれを警固した。白馬節会がこの門前で行われた事から「青馬陣」ともいい、内裏の南にあるから「南端門」ともいい、外郭にあるから「外門」ともいい、「南面僻仗中門」ともいった。構造としては檜皮葺、 切妻屋根の角柱の四脚門である。京都御所南面正門は建礼門である。現在も天皇皇后及び外国元首級のみが通ることのできる、最も格式の高い門とされ、御所一般参観時にも開門されることはないが、間近で見学することはできる。

写真５.京都御所の建礼門

５.諸門

京都御所は敷地の四方を築地塀（延長は東西約 250m、南北約 450m）で囲まれている。築地塀は 5 本の筋の入った、もっとも格式の高いもので、計 6 か所の門がある。すなわち、①南面には建礼門、②北面には朔平門、③東面の南寄りに建春門、④西面は南から北へ宜秋門、⑤清所門、⑥皇后門である。これらの門のほかに、穴門という、屋根のない入口が 12 か所ある。鬼門にあたる敷地の北東角では、築地塀がそこだけ凹んでおり、「猿ヶ辻」と称されている。名称の由来は、ここに魔除けのために日吉山王社の神の使いとされる猿を祀ることによる。

6.紫宸殿(ししんでん)

京都御苑の北西寄り、築地塀で囲まれた面積約 11 万平方mの区域が京都御所である。御所の敷地は東西約 250m、南北約 450mの南北に長い長方形で、そこにはかつての内裏に属していた多くの建物と庭園が残っている。御所の建物は近世を通じ、天正（1591 年）から安政（1855 年）の 9 度にわたり造営された。

その北側、敷地のほぼ中央のブロックは、天皇の日常生活や内向きの行事、対面などに使用された内向きの建物群で、小御所、御学問所、御常御殿などがここにある。御所敷地のもっとも北寄りのブロックはかつての後宮だった場所で、多くの建物が取り払われているが、皇后御常御殿、飛香舎をはじめ、皇后や皇子皇女などの住まいだった建物が残っている。展示品：高御座 （ﾀｶﾐｸﾗ）・御帳台 （ﾐﾁｮｳﾀﾞｲ）。

7.承明門(じょうめいもん)

紫宸殿(ししんでん)の南正面に位置する門である。 瓦葺、切妻 屋根の 12 脚門。天皇行幸や上皇御即位後の出入りに用いられます。 即位の礼．人形が 身にまとっているのは、即位の礼(先帝の崩御または譲位後の天皇即位を公に宣明する。

写真 6.京都御所の承明門

写真 7.京都御所の月華門

8.月華門（げっかもん）

内裏を構成する内閤門のうちの一つで、紫宸殿南庭（なんてい・だんてい）の西側の門である。現在の京都御所にも古式に則って再建されたものが伝わっている。校書殿と安福殿との間にあり、南庭東側の日華門とは東西に相対する。西の中門ともいい、右近衛府の陣に充てられたため、右近陣（うこんのじん）ともいう。

８.春興殿（しゅんこうでん、しゅんきょうでん）

春興殿は、平安京内裏十七殿の一。紫宸殿の南東、日華門の南にあり、西の安福殿と大庭をへだてて相対する。武具などを置いた。鎌倉時代、神鏡を置き、内侍所（賢所）ともなる。 身舎は東西 2 間、南北 7 間、北廂は東西 2 間、南北 1 間、東廂は東西 1 間、南北 8 間、東の孫廂は東西 1 間、南北 6 間、その南の方東西 1 間、南北 2 間は東、南が塀に囲まれる。南面中央に 1 間四方の廂であると思われる所がある。身舎の西面、北、および南からの第二の間に戸口があり、その前が土廂である。里内裏の春興殿は日華門の北、内侍所を奉安としたという。現在の京都御所にも同名の殿舎があるが、平安時代の頃の春興殿とは、位置関係が異なり、安政年間に造営された内侍所（賢所）のあった場所に大正天皇の即位礼にあたり造営された。

9.清涼殿（せいりょうでん）

清涼殿は、紫宸殿の北西にあり、東を正面とした南北棟の建物である。円柱を用い、床は板張り、天井は天井板を張らず化粧屋根裏とし、建具は蔀を用いるなど、復古的様式を用いる点は紫宸殿と共通している。清涼殿の昼御座（手前）と御帳台（奥）。右手奥に昼御座と御帳台。展示品：釣灯籠ﾂﾘﾄｳﾛｳ 5 基。身舎の南寄り、柱間 5 間分と、その東側の廂部分を広い 1 室とする。ここは天皇が日常の公務を行った場所である。身舎の中央に天皇の休息の場であった「御帳台」があり、一対の獅子狛犬がその前を護っている。ここだけは床が板張りではなく漆喰で塗り固められており、天皇はここで伊勢神宮などへの遥拝を行った。石灰壇の中に「塵壺」と称する円形の穴がある。冬期はここに火を起こして暖をとったという。身舎の北寄りには「夜御殿」（よんのおとど）と称する部屋がある。ここは、室名のとおり、本来の用途は天皇の寝室であったが、御常御殿に天皇の生活の場が移ってからは、形式的なものとなっている。夜御殿の東には「二間」（ふたま）という小部屋がある。古くは、間口 1 間、奥行 1 間の柱間で囲まれた空間の広さを「間」といい、この部屋は間口 2 間、奥行 1 間であることから「二間」と称されている。二間の北側には「弘徽殿上御局」（こきでんのうえのみつぼね）、夜御殿の北側には東に「萩戸」（はぎのと）、西に「藤壺上御局」（ふじつぼのうえのみつぼね）という小部屋がある。西廂には南から北へ

「鬼の間」、「台盤所」、「朝餉の間」（あさがれいのま）、「御手水の間」、「御湯殿」がある。

10. 御学問所（おがくもんじょ）

御学問所は小御所の北に位置する南北棟の建物である。屋根は入母屋造、檜皮葺。小御所と異なり、平安復古調の建物ではなく、建具は舞良戸を用い、内部の主たる室には床、棚を設けるなど、内部外観ともに書院造の意匠とする。

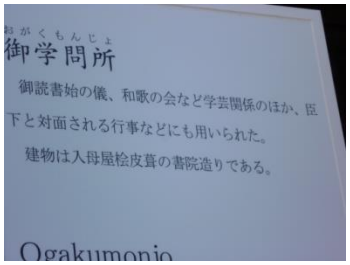

写真 8.京都御所の御学問所

家康による慶長度の造営時に初めて設けられた建物で、御講書始などの行事が行われたほか、学問ばかりでなく遊興の場としても用いられた。内部は東西 2 列、各列 3 室の 6 室構成になる。東列は北から南へ「上段の間」、「中段の間」、「下段の間」とし、西列は北から南へ「菊の間」、「山吹の間」、「雁の間」とする。上段の間と菊の間には床と違棚を設ける。展示品：人形 5 体 威儀いぎの者もの 2 体，威儀物ｲｷﾞﾓﾉ捧持者ﾎｳｼﾞｼｬ 3 体（太刀ﾀﾁ，弓ﾕﾐと桙ﾎｺ）

11.御池庭（おいけにわ）

小御所や御常御殿付近の庭は、池と遣水を中心とした、自然の風趣を生かした日本庭園である。こうした池水中心の庭園が造られるようになったのは、御所の慶長度造営時に小堀遠州が参画してからのことであるが、現在のような庭の原型ができたのは延宝度の造営時である。小御所、御学問所の東側の庭は大きな池を中心としたもので、御池庭（と呼ばれる。池は小御所側の西岸に玉石を敷き並べた洲浜を造る。池の中には 3 つの中島があり、木橋 2 基、石橋 3 基が架かる。

写真 9.京都御所の御池庭

写真 10.京都御所の御内庭

12.御内庭（ごないてい）

御常御殿東側の遣水を中心とした庭は御内庭と呼ばれる。遣水を渡った東側には 4 畳半茶室の「錦台」が建つ。御内庭に連なる、御涼所東側の庭は「龍泉の庭」と呼ばれる。この付近では遣水は東西 2 つの流れに分かれ、西側の流れは、御涼所と聴雪を結ぶ吹抜廊下の下をくぐり、一部は聴雪の縁下を通っている。遣水の対岸の東側には「地震殿」(泉殿とも)という小建物がある。これは地震発生に備えて屋根を軽く造り、他の建物から離れて建てた建物で、緊急時の避難所とされている。聴雪の北側にある枯山水庭園は「蝸牛の庭」と呼ばれるが、これは明治期の作庭である。奥には茶室がある。 http://ja.wikipedia.org/wiki/京都御所